

幸せな人、それは主のおきてを喜ぶ人

詩編 1 : 1－7



司祭 ヨハネ 井田 泉

聖霊降臨後第 13 主日

2025 年 9 月 7 日

上野聖ヨハネ教会にて

今日は詩編をご一緒に味わってみたいと思います。

毎主日の礼拝においては必ず交唱する詩編ですが、皆さまは詩編に親しまれているでしょうか。

詩編は聖書の中の祈祷書とも呼ばれる祈りの詩集です。ここには個人の願い、感謝、賛美、懺悔、信仰告白など、さまざまな祈りが含まれています。と同時に、詩編は古くからイスラエルの信仰共同体の礼拝において唱えられ、あるいは歌われてきました。イエスさまの時代もそうですし、わたしたちもそれを引き継いでいます。

マルコによる福音書の「最後の晚餐」の場面の、その最後(14:26)を見ると、こう記されています。

「一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山へ出かけた。」

ここで歌われた「賛美の歌」というのは、詩編 115～118 編だと言われています。その中にこういう言葉があります。

「神を敬う人の死は 主の目に尊い」 116:15 (祈祷書)

主イエスはこれを弟子たちと一緒に歌いつつ、間近に迫ったご自身の死を思っておられたに違いありません。

わたし自身のことを言えば、若いときから精神的に危ういところがあって、詩編を頼りにしてきたところがあります。鞆の中には必ず詩編付きの新約聖書を入れていました。

もう 30 年以上も昔のことですが、東京の聖公会神学院の教師

をしていたとき、全国の神学校の集まりがあつて仙台に出張しました。家を出て、電車に乗ったのですが、そこで聖書を忘れてきたことに気づきました。たちまち不安に襲われました。そこで山手線の新宿で途中下車して、本屋を探し回って、詩編付きの新約聖書を購入して心を落ち着けた。そういう思い出があります。

前置きが長くなりました。今日は詩編の最初、第1編を先ほど唱えましたので、それを読んでみましょう（祈祷書所収の詩編）。

まず「**幸せな人**」から始まっています。何と幸せな人か、と詩編の作者、詩人が声を上げているのです。どんな人が幸せな人と言われているのでしょうか。

1 幸せな人、それは神に逆らう者の^{はか}謀りごとに歩まず || 罪人の道に立たず、あざける者とともに座らない人

神に逆らって人を陥れるような陰謀に荷担しない人。人を見下して嘲笑するようなことをしない人。それが幸せな人なのですね。悪いことに加わらない人です。

先に否定的なことを述べましたが、次に肯定的、積極的なことを歌います。

2 主のおきてを喜び || そのおきてを昼も夜も思う人

これが幸せな人です。「主のおきて」というと、「命令」といった堅いイメージを持ててしまいますが、新共同訳などでは「主の教え」と訳されています。

主のおきて、主の教え。例えばイエスが第一の戒めと言われた「心を尽くしてあなたの神である主を愛しなさい」（マルコ 12:30）という教えです。わたしたちはこれをむつかしく感じてしまうかもしれません。わたしもしばしば神さまを愛していないことを反省し、懺悔します。

けれどもそういうことだけではない。わたしたちが神を愛する前に、神がわたしたちを愛してくださった。わたしのことをすべて知っていてくださる神、わたしの髪の毛1本も大切に思っていてくださる神。わたしを罪と滅びから救うために御子イエスを与えてくださった神。わたしを愛する子として招き、呼び寄せて、永遠にあなたと一緒にいると約束してくださった神。それほどわたしたちを神が愛していてくださることを、知って喜ぶのです。その愛を昼も夜も思い起こすのです。神の愛がわたしたちの中に浸透するとき、わたしたちのほうからも心から神を愛するようになる。これが幸せです。この世が与えることのできない幸福、祝福です。

神は「あなたの神」です。よその、疎遠な神ではない。わたしを片時もお忘れにならない「わたしの神」なのです。

途中をとばしてもう1度読みましょう。

幸せな人、それは主のおきてを喜び || そのおきてを昼も夜も思う人

わたしたちはこの幸せな人となるように招かれています

ところで同じような表現を聞いたことはないでしょうか。山上の説教の冒頭でイエスはこう言われました。

「心の貧しい人々は、幸いである、／天の国はその人たちのものである」マタイによる福音書 5:2

日本語の性質上、「幸いである」が後に来ていますが、元の言葉は「幸いだ」から始まります。イエスはわたしたちに向かって手を広げて、「幸いだ」と呼びかけられる。「心の貧しい人」、つまり魂が渴いている人。ほんとうの救いを心の奥で求めている人。そのようなあなたがたは幸いだ。そう言ってイエスはわたしたちを引き寄せられます。

詩編第1編も、主イエスの山上の説教も、最初の言葉が「幸い」の呼びかけなのです。

3 流れのほとりに植えられた木のように || 時が来れば実を結び

4 葉もしおれることがなく || この人は何をしてもすべては実る

苦勞しても、報われないと思っても、わたしたちはすでに神の恵みの流れのほとりに根を張っている。最後の最後、主が来られる日には豊かに実を結ぶ。

5 神に逆らう者はそうではなく || 風に飛ばされるもみ殻

6 神に逆らう者は審き^{さば}に耐えられず || 罪人は神に従う者の
集いに耐えられない

7 神に従う者の道は神に守られ || 神に逆らう者の道は滅び
に至る

わたしたちはこの詩編によって、不幸せではなく幸せの道を選ぶように、滅びの道ではなく命の道を歩むように呼びかけられています。そのために主の教えを、み言葉を喜んで、昼も夜もそれを思う。心に反芻する者であるようにと招かれています。

これでこの詩編第1編の大事なところに耳を傾けたことになります。

けれども、主イエスがこの詩編を心に留められたとき、この詩編の表面には現れていないことを感じられたのではないか。何のことかという、次のことです。

7 神に従う者の道は神に守られ || 神に逆らう者の道は滅び
に至る

この後半、「神に逆らう者の道は滅びに至る」と読まれたとき、神に逆らう者たちに嘲られ迫害されたイエスは、ほっとされたかどうか。ひどい言い方をすれば、「ざまあ見ろ」と思われたのかどうか。わたしは決してそうではないと思います。それどころか、神に逆らって滅びの道を歩む者のために泣かれたのではないか。

ルカによる福音書はこのようなイエスの言葉を伝えています。

「エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、言われた。「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない。」 19:41-42

イエスにはエルサレムの滅びが見えた。平和の道をわきまえず、滅びへの道を突き進む人々の痛ましさ、その悲惨を感じて泣かれた。

そればかりではありません。ここからは福音書には明確に書かれていないかもしれないけれども、新約聖書の書簡の中に何度も記されている重要なことです。イエスは、みずからその滅びに至る道を引き受けられた。神に逆らう人の不幸、道を誤り、滅び行く人々の滅びを引き受けて、死なれた。それがイエスの受難、もっとはっきり言えば十字架の死です。ご自分の命と引き換えに、滅びに向かう人々を生かそうとされた。

パウロはこう言っています。

「実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。」

ローマの信徒への手紙 5:6

「不信心な者」とは、ドイツ語では ^{ゴットローゼ}Gottlose 神なき者、神を失った者です。そのような神なき者、信仰なき者、神に逆らう

者、滅びるしかない者を救うために、キリストは死んでくださった。ここにわたしたちを限りなく愛される神の愛がある。これが新約聖書の福音です。

このようにして、詩編第1編は直接ではなく間接的にイエス・キリストを指し示しています。

幸せな人、それは主のおきてを喜び || そのおきてを昼も夜も思う人

神は、イエス・キリストは十字架の死と復活によって、わたしたちを滅びから命へと救い出してくださった。この教え、この福音を喜び、昼も夜もそれを思う。わたしたちはこのような幸せな人となるように招かれているのです。

祈ります。

神さま、あなたはわたしたちを幸せな人の道へと招いてくださいました。主に従って正しい道を歩むように、わたしたちを守り導いてください。また主イエスが、わたしたちとこの世界を滅びから救うために、みずから滅びを引き受けて十字架に死なれたその愛を、心に深く知ることができるように、聖霊を注いでください。主イエス・キリストによってお願いいたします。
アーメン